教科書の目次を読み解きながら構成する高等学校「公共」授業案研究

～規範」でつなぐ指導案づくり～

金子 幹夫（神奈川県立三浦初声高等学校）

１．はじめに

どうして高等学校「公共」は、青年期の学習からはじまり、哲学を取り上げ、その後政治的分野、経済的分野の学習に進むのか。この順番に、どのような意味が込められているのか。生徒は、「なぜ今日の授業でこの内容を学習する必要があるのか」ということを毎時間の授業で理解しないと、腑に落ちないまま時間だけが経過してしまうのではないか。これは、高等学校公民科教師が「公共」の授業開きを構想する際に直面する問題である。

２．教える側から見た問題解決に向けてのアプローチ

教える側は，生徒に学習内容の順番を理解させるための手がかりを見つけなければならない。「公共」の学習内容の中に，一年間を通して登場する用語や概念はあるのか。あるとしたら、その用語や概念をどのように授業案に組みこめばよいのか。本発表では，その手がかりとして「規範」を取り上げた。青年心理学で扱う「規範」，哲学の世界でいう「規範」，法学でいう「規範」，経済学の「規範」を軸に授業内容を構成できないかという試みである。

ところがここには大きな課題が存在している。それは，同じ「規範」という用語であっても，各学問分野がもつ枠組みが異なるため，「規範」という用語が全て同じ意味をもたないという課題である。この課題について，教師はどのようなことを知っているべきであるのか。それをどのように教材として生徒に説明することができるのか。

３．教える側と学ぶ側との間に生じる祖語

一方の，授業を受けている生徒は，各学問がもつ枠組みを意識しないで学習内容を理解しようとする場合が多い。教師と生徒の学習活動を外から見ると，教科書に沿って学び続けているように見えるが，その内側では認識の齟齬が発生している可能性がある。教師は，様々な学問分野の枠組みを意識して授業案を構成する。生徒は，自分の生活経験から得た知識と授業で得た知識とを組み合わせて学習内容を再構成していく。教師と生徒との間に生じる齟齬をどのように小さくしながら再構成を続けていくことができるのか。

本発表では，現場の教師にとって手に負える範囲で，各学問分野の枠組みを捉え直すことを試みる。その経過の中で、生徒がどのような反応を見せたのかということも合わせて報告する。

４．おわりに

「公共」の授業では，一つひとつの学習内容を丁寧に説明して生徒の理解を深めなければならない。しかし，一方で生徒に「どうしてこの学習を今日しなければいけないの？」という問いについての一定の答えをもちながら学ぶことも重要である。特に後者の視点が欠けた授業では、生徒は腑に落ちるまで理解することは難しいと考える。本発表は，教師と研究者の仕事との境界線という問題も抱えている。「公共」を教える教師は，学習内容について，どこまで再構築することができるのかということを考えていきたい。